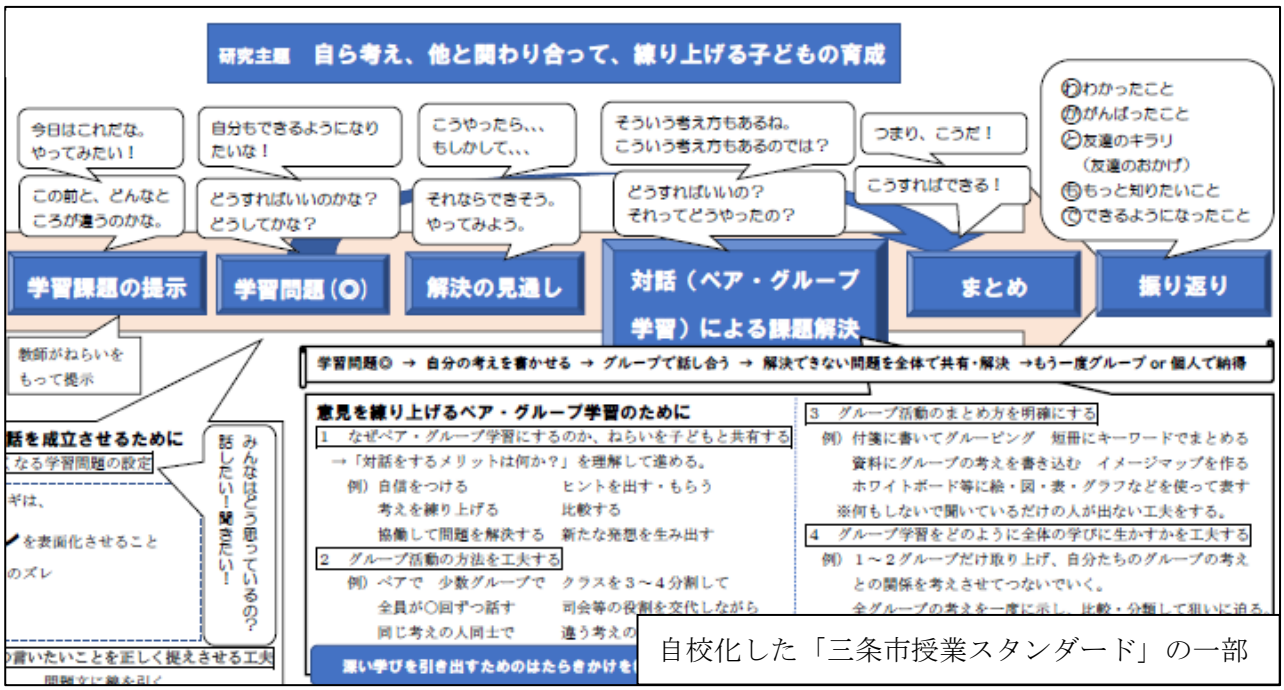
令和５年度　学習指導改善調査事業　公開校実践事例報告会　活動記録

１　基本情報

（1）研究主題：自ら考え、他と関わり合って、練り上げる子どもの育成
（2）教　　科：算数科、国語科（感染症による学年閉鎖のため、公開中止）
（3）期　　日：令和５年 11 月 15 日(水)
（4）会　　場：三条市立月岡小学校

２　研究の概要

当校では、令和２年度から三条市が提唱している「三条市授業スタンダード」を活用した研究を進めている。昨年度以降、この授業スタンダードを更に活用するために、当校の学力課題や身に付けさせたい力等を組み込み、自校化したものを作成し、これをもとに日々の授業を進めている。



自校化した「三条市授業スタンダード」の一部

昨年度は、子どもの「これってどうすればいいんだろう？」「解決したい！」という気持ちを引き出すための「学習問題（◎）」について研究を進めた。その結果、子どもの学習に対する意欲を高めさせ、問題を解くための見通しをもたせるために、以下のような方法が確認された。

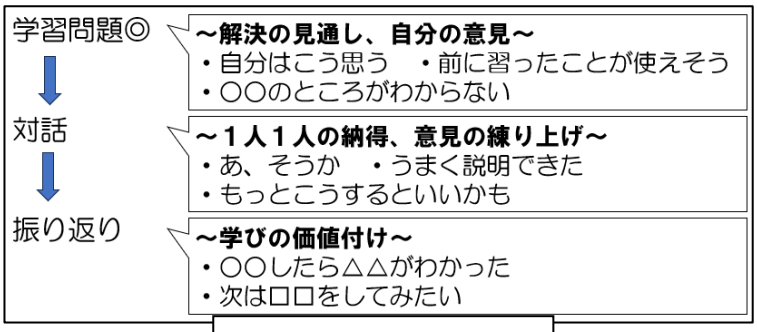
- 追求するための視点を絞り、課題を明確にする。
- 子ども１人１人の考えを教材として用いる。
- 既習事項を見やすく掲示し、いつでも活用できるようにする。

取組を進める中で、子どもの学習意欲の高まりを感じる一方で、以下のような課題が明らかになった。

- グループでの話し合いの際、意見を発表しただけで終わってしまうグループに対して、どのように働きかけたら考えさせることができるのかアイデアが沸かない。
- 子どもの考えを更に深めさせるための全体共有の手法が必要である。

そこで今年度は、研究主題を「自ら考え、他と関わり合って、練り上げる子どもの育成」とし、子ど

もが互いの意見を交換し合う中で、よりよい考え方を練り上げていく手法を見いだすことに重点を置いて研究を進めることとした。その際、子どもが自分の意見をもち、話合いによって自分がどのような学びを行ったかを自覚できるよう、右図の流れを意識した。



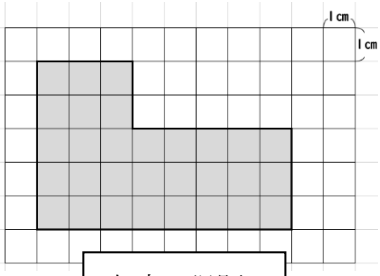
意識したい学習の流れ

３　授業の概要

(1) 授業者：教諭　藤田　夏季

(2) 単元名：４年生算数「面積　広さの表し方や求め方を調べよう」

(3) 概　要：



本時の課題

本時は、長方形と正方形の面積の求め方を身に付けた段階の子どもたちが、右図の複合図形の面積を求める授業である。

子どもたちは、課題が提示されると、即座に「分かること」「困ること」「もしかして」の３項目をノートに書き始めた。この課題の確認→「分かること」「困ること」「もしかして」の３項目をノートに書く→3 項目の発表という流れによって、各辺の長さが分かること、長方形でも正方形でもなくて困ること、2 つに分けたり長方形になるように移動させたりすれば面積が求められそうだということを共有できた。

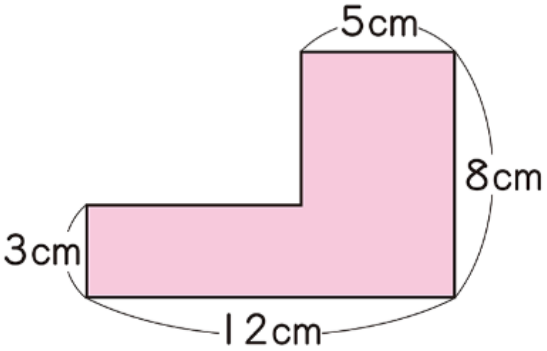
自由に席を移動し､解き方を確認し合う子ども

次に子どもたちは、一人でノートに解き方を書いた後、自由に席を移動し、友達の所に答えを確認しに行ったり、難しそうにしている友達に対してやり方を教えたりし始めた。対話のタイミングを個人の判断に委ねることで、必要感をもった主体的な対話となり、面積の求め方について活発に話し合う様子が見られた。自分なりの解法を見つけられなかった子どもは、自信をもって発表する子どもから方法を教えてもらい、「あ、なるほど。」などと反応していた。中には考え方を間違っていた子どももいたが、この自由対話によって計算間違いや図形の変形ミスに気付くことができた。

続いて、個々の考え方を全体に向けて発表させた。自分たちが考えた面積の求め方について、黒板に貼ってある図形に線を引いたり形を変えたりしながら、それに見合う式を発表していた。この発表を聞いていた子どもは、振り返りに以下のように書いている。

「正方形でも長方形でもない形の面積は、移動したり引いたり分けたりすると求めることができると分かりました。1 マスずつ数えるより、速く、簡単に、正確にできると思いました。」

最後に、本時で学んだ内容を使って、右図の面積を求める課題を提示した。それぞれの子どもが先程身に付けた解法を用いて面積を求めた。まずは一人で解き始め、面積を求めることができた子どもや解き方が分からない子どもが対話のために席を移動した。最初の課題と違ってマス目がないため、長さが分からない辺の長さを求めることに苦労している子どもがいたが、対話によって長さが分かると、「そうか！」と言って席に戻り、自力で面積を求めようとする姿が見られた。



(4) 指導者による指導の概要

・板書計画は、実際に黒板を使って書き込んだり掲示したりしたものがよい。文字や掲示物の大きさ、レイアウトが適切かどうかが分かる。また、子どもの思考が可視化されているかどうかが一目で確認できる。
・「分かること」「困ること」「もしかして」を課題提示後にいつも行うことによって、教師が何も言わなくても、子どもが自然と気付きや困り感、解決の糸口を共有することができる。
・対話を始めるタイミングや人数は一人一人の意思を尊重するべきである。中には対話をせずに最後まで一人でじっくり考える子どももいるが、それも尊重するべきである。
・違いを見つけさせる一番の方法は、並べることである。並べることで、子どもは勝手に見比べ始め、「共通点」と「相違点」を見付ける。そこから新たな気付きが生まれ、深い学びに結び付いていく。
・問題を解決するための手立てや既習事項は可視化・アイテム化し、いつでも使えることにしておくことが重要である。そうすることで、子どもは自然とその方法を使って学びを深めていくことができる。　（中越教育事務所　指導主事　茶谷　明　様）

４　研究の成果

１年を通して全職員が１回ずつの研究授業を行い、学年部で参観し合った。その後の協議会では話し合うことで、研究主題にせまるための方法として、今回報告した授業以外では以下の手法が有効であることが確認された。

・話し合い活動を促進させるためには、「学習問題◎」に対する自分の考えをもたせてから話し合うことが必要である。その際、「ＡかＢか」など、立場を決めさせるだけでも有効である。
・机間指導の際、話し合っている子どもに教師が「どうしてこうなるの？」「違いはどこ？」のように問い返しを行うことで、更に考えながら話し合うようになる。
・学級に安心して発言できる雰囲気があると、自分の考えを発表しやすい。授業中に対話が必要な場面を生み出すことと並行して、良好な人間関係を育む学級経営が必要である。

今後も、どの学級でも主体的・対話的で深い学びに向けた「三条市授業スタンダード」が実践できるよう、手立てを見出していきたい。そのためにも、全職員が同じ方向を向いて授業研究を進めていける雰囲気やシステムを作っていきたい。